

高校でのディクトグロスの実践 …一石多鳥の活動…

千葉 浩彦

1. はじめに

Wajnryb, R (1990) が提唱した「ディクトグロス」とは、聞き取った英文をペアワークやグループワークを通して復元する活動であり、文法力を高める結果が報告されている。さらに、文法力のみならず、リスニング能力やライティング能力の向上にも影響を与える(前田, 2008)ことから、英語学習における統合型の効果的な活動であるといえる。しかしながら、ある調査によると、ディクトグロスはディクテーションなどのほかの活動と比べて知名度は高くない。中学、高校といった教育現場では徐々に広まりつつあるようだが、実践されている例は多くないようである。どのような活動か知っていても、普通の教室での活動に取り込むことが難しいと思っている教師もいるかもしれない。ディクトグロスの手順は Wajnryb, R (1990) によると、下記のとおりである。

- a. A short, dense text is read (twice) to the learners at normal speed
- b. As it is being read, the learners jot down familiar words and phrases
- c. Working in small groups, the learners pool their battered texts and strive to reconstruct a version of the text from their shared resources
- d. Each group of students produces its own reconstructed version, aiming at grammatical accuracy and textual cohesion but not at replicating the original text
- e. The various versions are analyzed and compared and the students refine their own text in the light of the shared scrutiny and discussion

これらの意味は、次のようになる。

- a) 短めのまとまりのある文章を、学習者に対し、ノーマルスピードで(2度)読み上げる
- b) 英文が読まれている間に、学習者は知っている語句を書き留める
- c) 小グループになって、学習者は書き取ったメモを持ち寄って、お互いに見せ合い、共有したものから原文の復元をする
- d) それぞれのグループの学習者は、自分たちで復元版を作り出すことになる。文法的な正確性や文章の一貫性を目標とするが、原文を忠実に復元することをめざすものではない
- e) さまざまな復元した文章が分析、比較され、学習者はお互いに精密に調べ、話し合いをして自分たちの英文をよりよいものにする

ディクテーションは、英文を聞いてそのまま書き取る活動であるが、ディクトグロスは、そのまま書き取る必要はなく、聞き取った内容に合うように復元する活動である。また、読まれる回数が限られ、書き取ったものを持ち寄り、ペアやグループで話し合いをして文章を構築する協働学習でもある。今回は私の実践例を紹介させていただく。

2. 教科書のサマリーを用いたディクトグロス

1つのセクションの本文理解や音読が終わったときに、まとめの活動としてリテリング等を行うのも1つの手である。しかし本稿では、ディクトグロスを活動のバリエーションの1つとしておすすめしたい。使用する英文には、本文テキストそのままではなく、セクションごとに40～60語程度でまとめられたサマリーを用いる。教科書の付属物にデータがない場合には、ALTに依頼し、サマリーを作成してもらおう。手順としては、下記の通りに進めて行く。

- (1) 書き取るためのプリントを配布する。サマリーを読み上げる。(あるいは音声データを用いたり、ALTに読み上げてもらったりする。)
- (2) 1回目は内容を理解してもらうため、聞くことのみを指示する。プリントに自己評価の記入欄を設けて、どの程度理解できたかを記入させる。
- (3) 2回目からは実際に書き取らせる。内容によっては2回ではなく、3回聞かせる。文と文の間は10秒程度間を置くが、1文が長い場合は、意味の切れ目で適宜ポーズを入れて読む。
- (4) 聞き取りが終わったら、内容を思い出させながら、1度書き取った文章の「書き足し」、「削除」、「訂正」を行わせる。
- (5) その後、ペアを組ませ、お互いにわからなかったところを内容や文法等を考慮しながら、つなぎ合わせたり、埋め合わせたりして、できるだけ原文に近い状態に復元させる。このとき、原文と全く同じ文を復元する必要はなく、内容が同じであれば違う表現を用いて書いてもよい。(学習者は自分の疑問や問題を言葉にして発し、その言葉を振り返ることによって学びを深められる。)
- (6) ペアでの活動で、書いたものが十分でないときや、もう少し粘って考えたいという生徒がいるときは、別のペアとも組み合わせて、4人グループでもう1度取り組ませる。
- (7) そのあとは解答を(黒板に)提示して、聞き取れなかったところ、誤ったところなどを赤ペンで訂正させる。
- (8) 活動の終わりに完成した英文を音読させ、文法事項や内容を再度確認させる。

前述した教科書のサマリーを用いると、(1)~(8)の所要時間は20~25分程度なので、1セクションの内容確認やまとめに最適な活動である。また、すでに話の流れがわかっており、聞き取れなかった箇所はある程度推測しながら埋めることができるので、はじめてディクトグロスを行うには適切な教材であるといえる。習得させたい、あるいは確認したい文法事項がある場合には、意図的にサマリー内に組み込んだ英文を書き取らせることもできる。

この教科書サマリーを利用したディクトグロスを3、4か月続けたクラスは、高2向け共通テスト模

擬試験において、ディクトグロスを行わないクラスよりもリスニングスコアの平均点が上回った。本格的なリスニング教材でなくても、リスニング力を十分に伸ばせることがわかった。

3. 教科書以外の教材を用いたディクトグロス

より負荷をかけたい場合には、教科書以外の教材を利用してディクトグロスを行ってみる。生徒にとっては初見(初聞)の教員側で用意した長文を利用する。時間とレベルを調整するため、1段落あたり40~60語程度で、かつ英文の程度が授業で使用している教科書より易しい長文を利用する(生徒のレベルに合わせて語数を調整してもよい)。1回の活動で1つの段落を扱い、生徒が知らないような単語は活動の前に発音や意味を確認しておくが、そのほかの手順は教科書のサマリーを用いたときと同じように進める。初めて聞く英文になるので、学習者にとっては内容をつかむという負荷が課される。そのため、先述した手順(3)や(5)は、教科書のサマリーを用いたときより、少し難しくなる。

また、初見の長文の場合、理解度に差が出るため、2人ペアでなく4人グループで取り組ませることもある。4人のグループワークでは、2人でのペアワークと比べて活動に貢献する責任の度合いが低くなるので、進行役、提案者(自分の書き留めたものを、検討のたたき台として説明する人)、清書担当者(みんなで検討した結果を1枚のプリントに書いてまとめる人)、プリントを確認する人(スペリングミス等のチェック)など必ず何らかの役割を持たせる。また、次の活動時にはローテーションで役割を交代し、いつも同じ生徒が同じ役割にならないように工夫する。

この活動は毎日連続して行う必要はなく、週1回でもかまわないが、その場合には活動の前に、前回の内容について日本語で簡単に確認することで、学習者に話の流れを思い出させる時間をとることが大切である。また、題材にストーリー性のある内容を選ぶことで、生徒はどのような展開になるか楽しみながら活動に参加することができる。

私が行ったアンケートにおいて「1度聞いて内容を半分以上理解できた」と答えた生徒は、教科書のサマリーを用いたディクトグロスでは平均70%であったが、教科書以外の教材を用いた場合には、平

均 32.5%であった。このことから、初見(初聞)の教材は学習者にとって負荷が大きいと思われる。教科書のサマリーの場合は、英文がどのような内容なのかはおおよそ知っているのので、top-down 処理(自分がすでに持っている知識を生かして内容を予測すること)で文を補うことができる。しかし教科書以外の教材の場合は、top-down 処理と bottom-up 処理(細かく1つ1つを積み重ねて全体を理解すること)の両方ともを駆使しなければならないことが、ディクトグロスを難しくしている要因と思われる。

4. ディクトグロスにおけるランゲージング

「教科書のサマリーを用いたディクトグロス」の手順(5)で示したように、ペア・グループ活動では原文を再構築するためにランゲージングが行われる。ランゲージングとは鈴木(2012)によると、「学習者が自分の言葉を用いて第二言語(文法や語彙を含む)について説明することを通して、第二言語に関する理解を洗練させていくプロセスのこと」と定義づけられている。ディクトグロスにおけるペア・グループでの活動では、よく聞き取ることができなかった箇所を、聞き取った語句をもとに話し合いながら推測していくことが求められる。たとえば「(主語がわからなくて)動詞に-sがついているから、主語は3人称単数になるね」や「名詞のあとに-ingが続いているけれど、この-ingが後ろからこの名詞を修飾していると考えたら、意味が変だな。この文には動詞がないから、実はbe動詞を聞き逃したんじゃないかな」など、聞き取った語句をもとに全体の意味を考えるので、原文構築に向けて話し合いが進む。習熟度の高い学習者は、自分の文法力を駆使して推測し、ペア・グループ内で考えを説明することで、自分の文法の知識を確認することができる。一方、習熟度の低い学習者は、しっかり身につけていない文法を上位者が説明してくれるので理解できるようになる。また一斉授業の中では聞きにくいことも、ペアや小グループ内では質問もしやすいため、活動を通して、不明な点が徐々に解消していく効果が見られる。このペア・グループ内でのランゲージングが、ディクトグロスにおける利点の1つといえるだろう。

5. ペア・グループの組み方について

教室での実践では座席の隣の人とペアを組ませるのが手取り早い。しかし、隣同士がどちらも英語を苦手とする学習者であると、ペアワークが思うように進まないこともある。Shin, S-Y et al (2016)は、ディクトグロスの実践では、ペア間における第二言語の習熟度の違いが必ずしも結果に影響していないと結論づけ、習熟度の低い学習者はどのパートナーにも関係なく好結果が得られるが、特に習熟度の高い学習者とのペアワークで多くの好結果が得られ、1人で参考書や辞書を用いて取り組んだ学習者よりもよい結果が出ていると報告している。一方で、岩本(2012)は、3つのクラスを①「学力がどのグループも均等」、②「出席番号順に基づいた分配配置」、③「学力と人間関係を基にして編成」という条件で分け、ディクトグロスを実施した。そのアンケート結果から、②のグループ編成で実施したクラスは「グループで協力して活動できた」の項目と「今日の授業内容はよくわかった」の項目において、①と③のグループ編成で実施したクラスよりも平均点が低いことがわかった。この結果から、学力を考慮せずにグループ編成をすると活動に支障が出る、またグループ内で英語が得意な生徒がいない場合、そのグループは内容理解に困難を感じるようになることと考察している。

こうした研究結果もあるが、2人ペアを組ませたときに英語が苦手な学習者同士の場合にも、各自が書き留めたものを突き合わせ、少しでも完成形に近づけようとするペアも見られる。どうしてもわからない部分も残るだろうが、このような場合には、さらにもう1つのペアと一緒に4人グループで検討してもらう。このようにすることで、少しでも完成形に近づけることができる。

はじめからグループ(4人)で行うこともあるが、その場合には教員側であらかじめメンバーを決めておく。その際、グループの中に、1名は英語の得意な学習者を入れるようにしている。その学習者にリーダー性があると、みんなを巻き込み、話し合いをうまく進めることができる。クラスによっては英語の得意な学習者が少なく、検討が滞りがちなグループもあるが、それでも4人で取り組めば、原文に対して平均6割近く再現できていることが多い。

6. 生徒の感想

初めて取り組んだ感想として、

- ・似たような音の単語に惑わされるため、文法的に正しいかどうか考えて書くことが大切になってくると気づいた。
- ・a とか of はほとんど聞き取れなかった。複数形の s が聞き取れなかった。
- ・ひとりではなく複数の人と取り組むことで、知識の幅が広がると感じた。
- ・同じチームの人のおかげで、聞き取れなかった部分を納得しながら埋められた。
- ・文法を気にしながら聞き取るようにしたい。
- ・知っている単語でも聞き取るのが難しかった。

など、ペア・グループワークに関する好意的な感想が見られた。また、いくらか回数を重ねると、

- ・キーワードで書き留められるようにしたい。
- ・チームワークがよくなってきた。
- ・回を重ねるごとに、聞き取れた語数が増えている。
- ・意味を考えながら聞くのが大切だと感じた。
- ・文が長くなると聞き取るのが難しくなった。

など、回数の効果やストラテジーに関する感想が得られた。

7. おわりに

ディクトグロスの実践により、学習者の文法力、リスニング能力、ライティング能力への効果が期待できるほか、ペア・グループ活動によって協同性を育むことや、やりとりの仕方の技術も高めることができる。また、自分の活動を振り返ることにより、学習への取り組み方を自分で考えるようになる。1つの活動でさまざまな効果が期待できるまさに一石二鳥どころか、一石多鳥の活動といえよう。

参考文献

- 岩本藤男 (2012). 「グループ編成の仕方が活動意欲に与える影響」『中部地区英語教育学会「紀要」』第 41 号, 191-198
- 鈴木 渉 (2008). 「ランゲージングが第二言語学習に与える効果」『STEP BULLETIN』vol.20, 60-75
- 前田昌寛 (2008). 「ディクトグロスを用いたリスニング能力を伸ばす指導—技能間の統合を視野に

入れて—」『STEP BULLETIN』vol 20, 149-165

Shin, S-Y et al. (2016). The effects of L2 proficiency differences in pairs on idea units in a collaborative text reconstruction task. *Language Teaching Research*, 20(3), 366-386

Wajnryb, R (1990). *Grammar Dictation*. Oxford: Oxford University Press.

(岩手県立水沢高等学校教諭)